食わせろ!!

景山民夫＋山藤章二

食わせろ!!

景山民夫＋山藤章二

講談社

景山民夫　一九四七年、東京に生まれる。慶応義塾大学、武蔵野美術大学を中退。「シャボン玉ホリデー」で放送作家としてデビュー。その後「ヤング720」「出没！おもしろMAP」「クイズダービー」「タモリ倶楽部」などを手掛け、人気放送作家となる。著書には「普通の生活」「極楽TV」があり、「ONE FINE MESS 世間はスラップスティック」で講談社エッセイ賞（第二回）を受賞。

山藤章二　一九三七年、東京に生まれる。武蔵野美術学校を卒業。四年間、広告会社に勤務のあとフリーとなり、従来にないスタイルのさしえを開拓、講談社出版文化賞（第二回）、文春漫画賞（第十七回）を受賞。「週刊朝日」に連載のニュースエンターテインメント〈ブラック・アングル〉が大ヒット し、菊池寛賞（第三十一回）を受賞。著書には「ブラック・アングル」（1～6）「イラスト紳士録」「対談・笑いの構造」「戯画狩道」などがある。

食わせろ!!

一九八六年十一月二十七日　第一刷発行
一九八九年八月十日　第十刷発行

著者——景山民夫＋山藤章二

定価——一〇三〇円（本体一〇〇〇円）

装幀——山藤章二

© T. Kageyama & S. Yamafuji 1986, Printed in Japan

発行者——加藤勝久　発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目三一二一　郵便番号二二一〇一
電話　東京〇三—九四五—二一一一（大代表）
印刷所——株式会社精興社　製本所——株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えします。
なお、この本についてのお問い合わせは
学芸図書第二出版部あてにお願いいたします。（学二）

ISBN4-06-203087-X

食わせろ!!◉目次

宅配便 8
チリ紙交換 10
飛行機・その一 12
飛行機・その二 14
映画館 16
腕時計・その一 18
腕時計・その二 20
カラオケ 22
ガソリン・スタンド 24
弾き語り 26
いじめ 28
専門用語 30
プロフェッショナル 32
ファミコン・その一 34
カード 36
石油 38
ペンツ 40
フィリピン 42
ウィスキー 44
ファミコン・その二 46
名前 48
CM 50
食堂車 52
性病科・その一 54
性病科・その二 56
ウンコ・その一 58

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

根性 60
エアガン・その一 62
エアガン・その二 64
グルメ 66
ウンコ・その二 68
ホテル 70
トイレ 72
地図・その一 74
地図・その二 76
外国語・その一 78
外国語・その二 80
サミット 82
Vサイン 84
電卓少年 86
犯罪 88
駐車違反 90
落語 92
廃盤 94
ハマチ 96
モーニングサービス 98
横断歩道 100
ファン 102
いたずら 104
住処 106
海外旅行・その一 108
海外旅行・その二 110

銃器 112
サイン 114
書評 116
原発・その一 118
原発・その二 120
原発・その三 122
建売住宅 124
拾得物 126
お嬢さま 128
後遺症 130
コロッケ 132
奇人変人・その一 134
奇人変人・その二 136
エレベーター 138
うまい店 140
運動靴 142
老化現象 144
怪談 146
予告篇 148
孤立 150
金持ち 152
万引き 154
嫌悪感 156
超能力 158
観客 160
自己主張 162

人名 164
外人 166
宗教 168
受賞 170
パトカー 172
マラソン 174
新婚旅行 176
貸家 178
ボールペン 180
ロッキー 182
新雑誌 184
モグリ 186
機内食 188
礼服 190
トースト・その一 192
トースト・その二 194
カルガモ 196
辛いもの 198
作詞 200
結婚披露宴 202
ゴルフ 204
＊ ＊
タブーイラスト 山藤章二 206

食わせろ!!

宅配便

今、世間で何が一番デカい面をしているだろう、と考えてみたら、ま、色々あったけれど、住宅区域では宅配便のトラックが、かなり上位にランクアップされるのではないかという結論に達した。

宅配便というのは、なかなかに便利なものであるらしい。実は、僕は送り手としては一度も利用したことが無いのだ。大体が人様に物を送るのが嫌いな質なのである。贈るのは嫌いではない。貰うのが好きで贈るのが嫌いだったら単なるケチである。手紙ならともかく物品を送り付ける、というのが、どうも苦手だ。それならいっそ自分で持っていった方が良い、と、ついつい思ってしまう。

ところが根が不精なものだから、持参しようという時に、なかなか腰が上がらない。その結果、気持ちはあるのだけれど、実際には相手にそれが伝わらない、という結果に終る。損な性格だ。あのなー、オッチャン、要するにやっぱりケチなのと違うか？　断じてそんなことはない。

デパートで贈答品を買って発送して貰うことには抵抗感が無い。花屋に頼んで誰かの家へ配達して貰うのも平気だ。ただ、宅配便で送るという事に抵抗を感じてしまう。直接、その物品への関わりを持たぬ業者に委託する、というのが駄目なのかもしれない。

宅配便の荷物を受け取る、というのも苦手だ。あれはどういう訳か、大概が午前十時半頃に来る。僕にとっては、余程のことが無いかぎり、まだ寝ている時間である。必ず、三回チャイムを鳴らす。郵便配達だってベルは二度、と昔から決まっているのに、三回鳴らす。諦めの悪い奴だ。せっかく急いで届けに来たんだから、さぁ受け取れ今受け取れすぐ受け取れ、と三回鳴らすのである。絶対に出てやらない。大体が、僕の所にそんなに急ぎの荷物なんぞが来る訳がないのだ。仕事関係でも、本当に急ぎの物は宅配便なんぞに頼らずに、持参してくる。

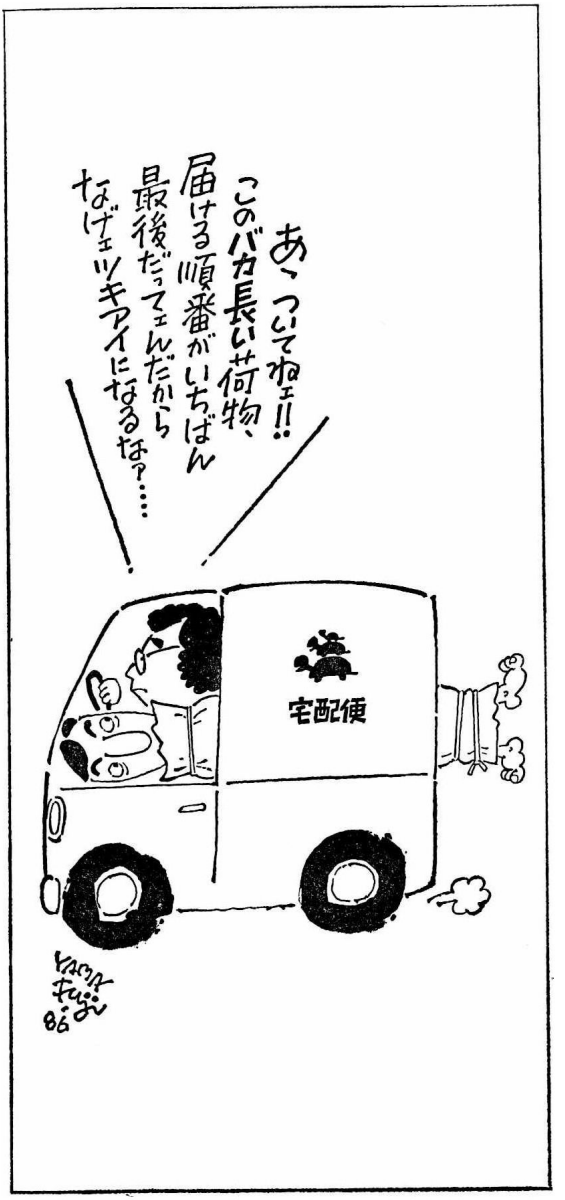
なんで、皆、そんなに急いで物を送るのかが分からない。そこへ持ってきて、さてこれからが本筋なのだが、宅配便の配達トラックというのは、どれも実に傍若無人な駐車の仕方をするのである。他人が高い金払って借りている駐車場に断りも無しに堂々と停める。短時間だからいい、と思うのは向うの勝手。こちらは大迷惑だ。平気で三台分の車の出入りを妨げる形で停めていく。

狭い道路のド真中に駐車して、そこいらの家に配達に行く。おかげで無意味な渋滞が起こる。エンジンかけっぱなしで行く。排気ガスが家に流れ込んでくる。そういう事に対する心遣いが何も無い。ちょっと目に余るものがある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それもこれも、配達に従事している人間に〝オレガ運ンデイル荷物ハ急ギノモノナンダゾ〟という意識があるからである。

ところが、よーく考えてみれば、この世に急ぎの物なんて、そんなに無いのであって、本当に急いでいる物は、例えば血液銀行の車みたいにサイレン鳴らして運ばれているのだ。だから、宅配便で運んでいる物なんか〝出来れば早く着いた方がいい物〟がほとんどなのであって、そのへんを皆、勘違いしているのである。



チリ紙交換

喋り始めに妙なアクセントをつける習慣の職業がいくつかある。

まず、一番顕著な例が、おなじみバスガイドさん。

「え、皆さまおはようございます、え、本日は○○観光をご利用頂いて、え、有難うございます、え、これから箱根仙石原までの、え、約二時間の短い旅ではございますが、え、私、一本糞、え、花子がご案内役を務めさせて頂きます」自分の名を名乗る時に、必ず姓と名の間に「え」が入る。独特のリズム感があるらしい。バスの走行のリズムに合わせているのかもしれない。立って喋るから、あの「え」で体のバランスを取っているのかしらん、とも考える。

ほぼ似た感じなのが、プロレスのリングアナで、これも選手の名を呼び上げるとき途中にブレスが必ず入る。

「ぅ、赤ぁコォナァー、にひゃぁくぅごじっパウンドォ」日本人でポンドをパウンドと発音する人はあんまりいないのではなかろうか。「ぅ、ふじぃなみぃ、ぅ、たつぅみぃぃぃ」こちらはバスガイドほど喋り出しの接頭語が明瞭でない。小文字で「ぅ」ぐらいなのだ。女子プロレスになるともっとあざとい発音となる。

「え、ダブリュダブリュダブリュエフウ、え、チャァァァンピオンングング、あ、デェビルゥゥゥゥ、え、まぁさみぃぃぃぃえおあぉ」

ミニバトの婦人警官のスピーカーでのアナウンスもこのたぐいだ。

「え、この通りに駐車中の……」やはり話し始めに「え」が付く。あれは、もしかするとマイクで喋るということに対する意気込みが「え」という接頭語になって表われるのかもしれない。

いま挙げたのは不愉快ではない例。婦人警官のは、こちらの立場によるが、少なくとも聞いただけで頭に来ることはない。

不愉快なのは、これを録音でやられるやつである。一番嫌なのがチリ紙交換の車のスピーカーから流れてくる、妙に悪凝りしたアナウンスだ。なにしろ録音だから、自宅で頭ひねってコピーを考えていやがる。ゆっくり走るから、それに合わせたつもりで実にもったりもったりした嫌な喋り方をする。

「え、まいどおなじみチリィィがみこぉかんで…ございます」お前なんぞと馴染みになった覚えはねえ、とわめきたくなる。必ず、こちらが仕事のアイディアを考えている時を狙って来る。「ごかてぇで…ごふようになりました、ふ

るしんぶん、または、ふるざっし……」なんでそんなとこに「または」を入れるんだ。それにもっと素早く喋れねぇのかよ、と完全に落語の『長短』の世界に入ってしまう。「またはカタログるい、または、ポスター、そしてでんわちょう」原稿用紙を引き裂き、マッチを持って表に飛びだして行く。野郎、カチカチ山にしてやる、という勢いである。ところが、そういう奴に限って、アナウンスのもったりとした口調と反対に、角刈りの、妙に腕っ節の強そうな男だったりするのだ。ギロリとにらまれて、「あ、お願いします」などと言ってあわてて新聞の束を取りに家に戻ってしまう。こういう時は、つくづく自分を情け無いと思う。

飛行機・その一

飛行機嫌いという人は意外に多い。特に昨年の日航機事故以来、〝隠れ飛行機嫌い〟がかなり表に出てきたようだ。ビートたけしがそうだったのには、いささかびっくりした。なにしろ彼は明治大学工学部を出ているのだ。芸能界には珍しい理工科系タレントなのである。飛行機が何故飛ぶかという理論は充分に承知している筈である。それでも駄目らしい。あの事故の一週間足らず後に、福岡から東京に戻るのに、わざわざ九時間かけて新幹線で帰ってきたという。

三年ほど前に一緒にセブ島に行ったことがあるけれど、別に飛ぶのを怖がっている様子もなかった。その後もオーストラリアだのスペインだのに行っている。やはり隠れ飛行機恐怖症だったのだろう。

実は僕もそうなのである。海外取材の多い仕事をしているから、もう通算すれば五百回以上飛んでいることになるのだが、いまだに怖い。特に離陸の時が怖い。機体が滑走路を離れる瞬間が物凄く怖い。タイヤが機体に収納される際のギイイイイーンといった音など聞くと、すわ事故かと思ってしまう。ちょっと揺れるとそこらにある物にしがみついて脂汗を浮かべてしまう。しがみついたって何にもならないことは分かっているのだ。なにしろ、そこらにある物は肘掛にしろ前の座席にしろ自分と一緒に飛んでいるのである。落ちる時はそれごと落ちる。そんなことは分かっているけれど、やはりしがみつかざるを得ない。溺れる者は藁をもつかむ、とはよく言ったものである。

もっとも、僕の場合は周囲に自分より怖がっている奴がいれば、それで恐怖感が薄れてしまうという傾向がある。優越感で恐怖に勝つのである。「あ、こいつ飛ぶ前からもう怖がってるぞ、だらしない奴だなぁ。必死で雑誌に神経を集中させようとしてるけど駄目なんだな。何度も同じページをめくり返しているもんな。書いてあることがまるで頭にはいってないんだ。さぁ飛ぶぞとぶぞどうなるかな？あ、肘掛を握った手が白くなってらぁ、汗かいてる汗かいてる」

要するに自分と同じ反応を示しているのだが、観察する余裕があるだけこっちの勝ちだと思う。但し、一度だけ、あまりに相手が怖がるのでこっちの負けとなったことがある。フィリピンのローカル線で隣に座った現地の婆さんが極度の怖がりだったのだ。生まれて初めて飛行機というものに乗ったらしく、やにわに座席の上に正座してしまった。ベルト着用のアナウンスが流れたら、しばらくバックルをいじくりまわしたあげく、エイとばかりにコマ結びに

結んでしまった。

エンジンがかかったら、突如として僕にしがみついてきた。こらこらこらと引きはがして「大丈夫ですよ」と英語で声をかけたが聞く耳を持たない。今度は聖書を出してお祈りを始めた。目を閉じて必死で祈るのだ。こっちも嫌な気分になってきた。次に讃美歌の本を出してデカい声で歌いだしてしまった。スチュワーデスがとんできて静かにして下さいと注意した。婆さんにではなく僕にしたのだ。どうやら親子だと思われたらしい。離陸の時になったら急に静かになった。水平飛行に移ってからよく見たら婆さんは完全に失神していたのである。

飛行機・その二

初めて飛行機に乗るという奴をからかうのは面白い。子供ではなく、大学出て二年もたっていて、仕事も出版社勤めで若者向けの雑誌の編集者なぞやっているくせに、生まれてから一度も飛行機で旅行したことがないという珍しい男が身近にいた。それが出張で札幌へ行くことになり、全日空で飛ぶと言って、半分うれしそうな、半分不安そうな顔で僕の事務所に来た。願ってもないカモである。

「そうか、いよいよ飛行機の初体験をするのか。ま、君も大手出版社の社員なんだから、会社の名に泥を塗るようなことをしてはいけませんよ」内心は泥を塗りたくってほしくてウズウズしているのである。

「飛行機というのは、あれでなかなか独自のルールがあって難しいものでね」明治時代のご隠居さんみたいな物言いになってしまう。「まず、飛行機にはクラスがあるのは君も知っているよね？」国内線の一部に特別料金のファーストクラス並みの席が出来る前のことだ。ジャンボ機の二階席だって普通のシートしかない。

「ちょっとチケットを見せてごらん。ほおー、豪勢なもんだねぇ平社員の出張にファーストクラスとは、さすが○談社だ」「あのぉ、どこでクラスの違いが分かるんですか？」

「ここのとこにYと書いてあるでしょう、これが優等席の意味」そんな馬鹿な表示があるものか。

「だからチェックインの時にね、カウンターではっきりとファーストクラスですからと念を押すこと」

カウンターのお姉ちゃんの顔が見ものだと思った。

「それからゲートをくぐる前にハイジャック防止の検査がある」「そのぐらい知ってますよ」

「金属探知機とX線の二つがあるからね、X線の方は上着とシャツを脱いで下着になって並ぶ」

「脱ぐんですか？」

「当たり前でしょう、小学校でレントゲン検査受けなかった？」「あ？　あれと同じか」

「乗る時に搭乗券をスチュワーデスがチェックする。これは電車の切符と同じだから、降りる時にちゃんとスチュワーデスに渡す」そんな物渡されたって困るだけだ。

「荷物はチェックインの時に預けるんだからね。向うについたらバゲージクレームという所があるから、そこで受け取る」

「あ、ちょっと待って下さい」とうとうメモをとり始めた。

「そこはベルトコンベアーみたいなのがグルグル回っているから、それに乗ると荷物のある所まで自動的に連れてってくれる」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com